二〇一八年八月三日

一陣の風炎昼を和ましむ　せいじ
気懸りに決着つけしより涼し　たか子
万歩計五百に満たぬ酷暑かな　明日香
我が町の手作り自慢夏祭　満天

二〇一八年八月二日

新聞配達短夜の街動き出す　やよい
清流で洗ふ野菜の籠涼し　そうけい
畑に水やれば寄り来る黒揚羽　よし女

二〇一八年八月一日

夏草のカーブに電車消えにけり　三刀
風鎮は流水模様夏座敷　菜々
雨乞の鈴の音高し雲の峰　よし女
駈け回る吾子の浴衣の寸足らず　なつき
稲光一閃夜の街浮かぶ　宏虎

二〇一八年七月三一日

遠花火消えて残りし火星かな　明日香
船旅の甲板に見る遠花火　はく子
駅前には高やぐら組み盆用意　たか子

二〇一八年七月三〇日

山溪を七曲りしつバス涼し　宏虎
英虞湾の真珠筏に月あかり　愛正
ひまわりの百万本が吾に笑む　よし女
風鈴の路地ゆく風を捉へけり　さつき
生き返るとは斯くならむ冷房車　せいじ

二〇一八年七月二九日

宮涼しいづこに立つも水の音　菜々
海沿ひの駅一呑みに大西日　せいじ
雲の峰プレーボールと声高く　菜々
野分後の名残の風と思ひけり　ぽんこ
ほつとして鉢戻しをり野分後　明日香

二〇一八年七月二八日

暑気払好みの碗にお薄点て　満天
イルカショー涼し飛沫に濡れ鼠　もとこ

毎日句会みのる選・二〇一八年八月五日